

鋼鉄の男、碧き航路に立つ

Soviet

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

遂に死去してしまった同志スターリン。しかし、何故か目を覚ますと…なんとアズレンの指揮官になっていた！（この時点でおかしい）

極度の人間不信に悩まされつつも、母港のKAN—SEN達と過ごしていく同志スターリンを描いたお話…。

つまるところアズレンにハマった共産趣味者の駄文ですので、お暇な方はこんなもので良ければお納め下さい。

目次

「運命の歯車が狂った日」	1
「同志スターリン、Re：start」	7
「よろしい、ならば冷戦だ」	12
「花より団子、紅茶よりウオツカ」	20
「初陣」	30

「運命の歯車が狂った日」

…1953年3月、ソビエト連邦は衝撃に包まれた。

あの「赤い皇帝」ことヨシフ・スターリンの死去である。

30年近くにも渡りソ連共産党のトップを務め、自らの敵となる者、自らのテンポを乱す者を闇へ葬ってきた独裁者が、病によって倒れたのだった。

「二人の人間の死は悲劇だが、数百万人の人間の死は統計上のデータではない。」

彼は生前にこんな言葉を残していた。政治家、将校から一般市民に至るまで、数百万人を粛清してきたスターリン。そんな彼のたった一人の死が、ソ連に衝撃をもたらしたのだ。

何故、スターリンは死んだのか。

3月1日、それは起こった…。

ソ連共産党の重鎮たちとの徹夜の夕食を終え、幾つもある寝室の一つへと向かったスターリン。常に誰かに暗殺されると恐れていたスターリンは、寝室を幾つにも分け、外側からは警備責任者が持った一本の鍵でしか開けられないという厳重っぷり。もちろん、スターリンの許可なく開ける事は許されない。

彼は夕食の後に夜遅くまで仕事をこなし、翌日昼の11時頃に起きるといふ生活をしていた。

部屋に入り、ランプをつけて部屋中を見渡す。伏兵がいないか用心深く観察するのだ。

安全を確認すると、机の上に広げられた書類を見てため息をつく。椅子に腰掛け、いつものように執務をこなす。だが、今日はいつもと感じが違った。

…先程からずっと自身に向けられる、謎の視線。他人を騙し、道具として扱ってきたスターリンは、人の視線というものに敏感になっていた。

「…誰だ！分かってるんだぞ、出てこい！」

スターリンの叫びと同時に寝室の鍵が開き、扉が開いた。

恐怖と緊張から、彼の心臓の鼓動はいつになく加速し、冷や汗が額に滲む。

「どうしました、同志スターリン！」

そうして扉から現れたのは、警備を任せている将校だった。

思わず唾然とするスターリン。そんな様子を見て、将校はこれから起こるであろう出来事が容易に想像できた。

問題点① 「寝室の扉を無断で開けた」

問題点② 「執務の邪魔をした」

問題点③ 「同志を驚かせた」

|| 肅☆清

「も、申し訳ございません同志！何者かの襲撃かと思ひまして、つい…。せめて命だけはお助けください！」

必死に命乞いをする将校。だが、将校に掛けられたのは怒号でもなく、静かにシベリア送りを宣告する冷酷な言葉でもなかった。

「あ？ああ、何だ…お前達だったか。…何を呆けている、早く警備に戻れ！」

「はい！申し訳ございません！」

死刑宣告をされなかった事に戸惑いながらも、すぐに持ち場へと戻る将校。

「ならば…さっきの視線は一体誰だ？」

今はもう感じない。まさか、気のせいだったとでも言うのか。

暗殺を恐れ過ぎるあまり、幻にまで苛まれるとは。

「…私はもうおしまいだ。誰も信じられない。自分さえも。」

以前腹心の部下フルシチョフに呟いた言葉だったが、いよいよ現実味を帯びてきたな、と感じつつ、いつも通り執務に戻ろうとした、その時だった。

「…うっ！かはっ…！ぐああっ…！」

突如胸を抉られるかのような痛みがスターリンを襲った。

慌てて机に腕をつこうとするが、麻痺した右半身では体を支え切れず、床に倒れてしまう。

胸を襲う痛みは未だ続き、立ち上がることすら出来ない。

床に倒れ伏すスターリン。ふと、何者かの足音がした。

靴の音ではない。この感じは素足か。だが、今のスターリンには死神の足音に他ならない。

「私はまだ…死ねない！死にたくない！」

だがスターリンの必死の懇願とは裏腹に、遠のいていく意識。

そんな中、ついに「何者」かが口を開いた。

「心配しないで。…あなたにはまだ、やって欲しい事があるもの。」

何の事が聞こうとしたが、遂に意識を失ってしまった。

こんな事があつたにも関わらず、肅清を恐れた将校は今度こそ鍵を開けなかった。命令があるまで、鍵を開けないのが仕事だからだ。

…しかし、丸一日何の指示もない事を不審に思った家政婦の判断により、恐る恐る扉が開けられた。

そこには、重篤な状態に陥ったスターリンが床に寝転がっていた。

ソ連の要人達と医者が集まり、様々な手を尽くした。一時は意識を取り戻す事もあつたが意志の疎通は叶わず、遂に4日後の3月5日、スターリンは74歳で亡くなった。

葬儀は国を挙げて行われ、世界中に独裁者スターリンの死が伝えられた。

…その頃、スターリンは感じるはずのない浮遊感に目を覚ました。

「私は…死んだのか。」

これはきつと魂か何かなのだ。そしてこれから、肅清してきた者達の怨念と向き合わなくてはならないだろう。

「ふふっ。調子はどうかしら？」

ふと、上から声がした。

「誰だ！」

スターリンが上を見ると、少女が佇んでいた。しかし、その少女の外見は、「異質」そのものだった。

身体だけを見れば精々服を全く着ていない、くらいのものだったが、彼女の背後には巨大な艦砲と、数多の触手が蠢いていたのだ。しかし何よりもスターリンの意識を引いたのは、薄暗いこの空間の中で煌々と輝く金色の瞳だった。

「私は《オブザーバー》。お初にお目にかかるわ、スターリン。…いや、ジュガシヴィリと呼んだ方が良いかしら？」

(こいつは一体何者なのだ…何故私の名前、しかも本名まで知っている?)

オブザーバーと名乗った少女は妖しい笑みを浮かべている。

「お前は、何故私を知っている。」

「それは、ずっと前からあなたを観察していたからよ。あなたの存在を感じ取った時、居ても立ってもいられなくなって飛び出してきたんだもの。」

「…もう既に死んだ私をどうするつもりだ。」

するとオブザーバーは指を振る。違う、ということか。

「あなたは確かに死んだわ。けれど、まだ終わりじゃない。」

「どういう事だ？」

「あなたには、こちらの世界でもう一度生きて貰うわ。」

「…やり直す、そんな事が出来るのか。」

スターリンはまだ出来る事があつたと思つている。ソ連を永久に不滅たらしめるまで、私が出る事は後一步だったと。

「ええ。でも、あなたは国の王にはなれない。…正確には違うわ、私はなつて欲しくないけれど。」

「意味が分からんな。書記長たるこの私を、国のトップとして使わずしてどうする?」

こいつが私を呼んだのは、きっと私がソ連の、国のトップだったからだろう。

「私はあなたに、指揮官になつて欲しいのよ。」

「指揮官…?」

「こちらの世界には、私のように人の形をしたフネがいる。そんな彼女達を纏めあげる事が、あなたにして欲しい事なの。」

立場はどうあれ、結局は人を纏める仕事か。

「なるほど、確かにお誂え向きだな。」

「分かつて貰えたかしら?」

オブザーバーはふふつと笑う。

(初めて彼の存在を感知した時、感じたわ。彼なら、こんなつまらない世界を、少しでも変えてくれると。私は本当に面白いものが見たいだけ。奴らとは違うわ。)

だが、用心深く、人間不信なスターリンはそう易々と他人の口車には乗らない。

「だが私はお前を信用していない。結局私を指揮官にして、果たしてお前に利点があるのか？」

「信用してとは言っていないわ。あなたは生き返れて幸せ、私も目的が達成されて幸せ。お互いに損なんてしないでしょ？」

スターリンは考え込む。ここで私がつまらない意地を張って奴の提案を拒否しても、お互い良い事は無いと。

(どのみち私は死人だ。もし奴に利用されているとはいえ、殺される事は無いだろう。奴は「私に」指揮官になって欲しいのだからな。)

「…そうか。なら、精々やらせて貰うとするか。」

「ふふっ♪? 感謝するわ、スターリン。」

彼女は手を伸ばす。細く華奢なその手を、老いた皺だらけの手が握る。

彼女はスターリンの手を握ったまま上へと昇って行く。やがて、光が揺らめく水面が見えてきた。

「さあスターリン、私を楽しませて頂戴ね♪?」

水面を飛び出すその時、スターリンは目を瞑った。しかし、水から出る感覚はしなかった。代わりに、柔らかい何かに着地した感覚が全身を襲う。

目を開けると、見知らぬ部屋のベッドにいた。

「転生とは、結構突然なものだな。…!?!」

眩いたスターリンは驚いた。かつての老人の声ではなかったのだ。慌てて全身を確認すると、やはり身体は見知らぬ青年に変わっていた。

「はあ…」

深くため息をつき、伸びをする。そしてベッドから起き上がり、部屋にあった鏡の前に立つ。生前の姿と比べて随分と美青年だ。きつ

とオブザーバーが用意してくれた器だろうか。言語もロシア語ではなくなっているが、何故か理解できた。よく出来た世界だ。

「ここから、指揮官としての私が始まるのか。うむ：悪くないな。」

指揮官とはどういったものかは知らないが、部下がいるなら精々使い潰してやろう。

それが「赤い皇帝」ヨシフ・スターリンなのだから。

「同志スターリン、Re：start」

ソ連共産党書記長としての人生を終えたスターリン。しかしオプザバーと名乗った少女の手によって、異世界で再度生を受ける事となった…。

改めて自身の置かれた状況を整理するスターリン。

「私はまず、異世界へとやってきてしまった。これからはこの体で、艦隊の指揮官として生きる、か。」

聞けば頭のおかしくなる話だが、実際それが現実として起こってしまっているのだから、認めざるを得ない。

「さて、どうしたものか…。」

まだこの世界に来たばかりで、まるで右も左も分からないような状態だ。とりあえずカーテンを開け、窓の外を見ると、ソ連では見ることとの無い、真つ青な海が広がっていた。

「あいつめ…器を用意してくれたはいいものの、説明も無しに放り込むか！」

ここは恐らく母港だろうが、その内部構造までは分からない。誰かが来るのを待つか、手探りで進むか…。最初から行き詰まってしまった。

すると、足音が近付いてきた。念のため扉から離れ、来客に備える。それから間も無くして扉がノックされた。

「指揮官、もう朝ですよ…：…ってあれ？今日はお早いですね。どうしたんですか？」

入ってきたのは紫色の髪が特徴的な元気いっぱい少女、ロイヤル駆逐艦のジャベリンだった。勿論、スターリンは知る由も無いが。

「ああ、おはよう…。今日はたまたま早く起きただけだ。」
とりあえず違和感の無い返しをしておいた。

(明日からはこんな早く起きないだろうしな…。)

「そうなんですか…：…さあ、今日も一日頑張りましょう！」

「…ああ。」

こういった奴にはなんとなく自分のペースを乱されるな、と思うス

ターリンだった。何にせよこれは好機。この母港を知っているであろうこの少女についていけば良い。

鼻歌を歌いながら歩くジャベリンについて行くと、何人かとすれ違ふ事もあった。それらに軽く会釈をしてやり過ぎした。

青い空が広がり、陽射しが容赦なく照りつける。ソ連では感じる事の無かった暑さが少し慣れなかった。

しばらく歩くと、大きな扉の前にたどり着いた。恐らくここが執務室なのだろう。

扉を開けると、かなり広い部屋だった。壁の一面は窓になっていて明るく、大きなガラス張りの棚には書類が綺麗に収納されていた。他にも幾つか優雅さを感じさせるような家具が置かれていたり、赤い絨毯が高級感を出している。モスクワの執務室より良いかもしれない。

「これは…凄いな。」

驚きで目を丸くするスターリンを怪訝そうに見つめるジャベリン。

「凄いつて…指揮官がいつもお仕事してる部屋じゃないですか？」

「あ…ああ！そうだな。改めて見ると、良い場所で働かせて貰ってるなど思っただけだ！」

（しまった…どうにもこの体の事を知らないからな。）

慌てて取り繕うスターリン。とりあえず書類でも片付けようと奥の席につくと、そこでふと気付いた。

（…この書類、何書けば良いんだ？）

何から何まで情報不足。ここにきてオブザーバーに説明を要求しなかった自分を恨めしく思う。

（このまま、転生してこの体に移った人間だということのを隠し通して過ぎすのか…？だが、言ったところで果たして信じるだろうか…。）

何にせよ、この世界に来たばかりにも関わらず仕事をしろと言われても、無理にも程がある。ここは素直に打ち明けるべきなのか…。

「そんなに考え込んで、どうしたんですか指揮官？」

ジャベリンが心配そうな顔でこちらを見ている。

（果たして…こいつは信用して良いのだろうか。）

本当の事を打ち明ければ、追放されるかもしれない。いつだって利用価値の無くなった人間は捨てられるものだ。

(…かつて私自身がそうしたように。)

指揮官が今朝から、様子がおかしいのはジャベリンも気がついていたよう…。。

「…今日の指揮官、いつもに比べて元気がないように見えます。ここに来る途中だつて色んな子とすれ違いましたけど、いつもなら調子とか聞いたりして、みんなに優しくしてるじゃないですか！…でも今日は簡単な会釈だけでした。それ以外でも、表情が暗かったり…。」

未だにどこか暗いスターリンの表情。普段は優しくかったからこそ、胸には不安が募るばかりだった。

「指揮官、大丈夫ですか？わたしに出来ることなら、何でもお手伝いしますよ…？」

ジャベリンがスターリンの手にそつと触れる。しかし、その手を振り払ってしまう。

「触るな！」

拒絶され、絶句するジャベリン。

「しき…かん？」

シヨックのあまり頭の整理が追いついていないのか、ただそこに立ち尽くしている。

(…咄嗟にやってしまったな。信用出来ないとはいえ、心配してくれる者を拒む事はなかったというのに。)

ようやく現状を理解したジャベリンの目から、大粒の涙が零れた。「もしかして、ジャベリンが何かしちやつて、わたしの事嫌いになっちゃったんですか…？そんなの嫌です…っ！」

床に膝をつき、泣き崩れるジャベリン。流星のスターリンも、まさかこんな事になるとは思わなかった。

(…ここまで心配させておいて、泣かせる訳にもいくまい…。どのみちこのまま隠し通せるか怪しかったしな…。)

椅子から立ち上がると、ジャベリンの頭をそつと撫でる。

「安心しろ、と言うのも説得力が無いな。だが、嫌いにならなつたら

ん。」

「ついつい前世の口調が出てしまったものの、全てを打ち明ける決心をしたので、そのまま続ける。」

「事情は必ず後で説明する。だから待っている。」

「は…はい。」

先ほどとは打って変わって優しい反応をした指揮官に戸惑いながらも、ひとまず安堵した様子のジャベリン。

「そうだな…早速頼みたい事がある。」

「はい…何でしょう?」

「こう、なんと言うか…母港全体に私の声を聞かせられる、放送設備のようなものは無いか?」

「え?ありますけど…忘れちゃったんですか?」

「あ…ああ、それもこれから説明する事と関係がな…。」

困ったように頭を掻くスターリン。

しばらくすると、放送開始を告げるチャイムが母港中に鳴り響く。

「諸君、突然で申し訳ない。だが、どうしても話しておかなければならない事があるのだ。」

ざわつく母港内。皆も、指揮官に優しくして貰った経験があるため、言葉に耳を傾ける。信頼している、とも言えよう。

「…こんな事を言うのは良くないと思うが、お前達の知る指揮官は、もういない。」

指揮官の口から、指揮官はいないと言われても意味不明だろう。真意を汲み取れた者はこの時点では居なかった。

「私はヨシフ・ヴィツサノリオヴィチ・スターリン。お前達のよく知る指揮官の体を借りて、異世界からやってきた。」

ざわめきは一層強くなる。別の人間が、指揮官の体を借りて、異世界からやってきたなど、信じられようか。

「信じられないだろうが、実際私はお前達の内一人として知っている者はいない。これは紛れもない事実だ。」

母港のKAN—SEN達の反応は様々だった。ふぎけるなど糾弾する者、この指揮官は信頼できるのかと事実を受け入れる者、意外に

もあまり気にしていない者までいた。

「だが、中身が変わったとて仕事までは変わらん。絶対の勝利を約束しよう。これでも前世では、一国の長を務めていたものでな。」

大多数のKAN—SEN達は、スターリンを信用する気はないように見える。以前の指揮官と比べて、船であって「人の心」を持つ自分たちに少しでも寄り添おうとする気遣いを、欠片も感じられないからだ。

「以前の指揮官はとても優しくかったと小耳に挟んだが…私にそれを期待するのはあまり勧めない。お前達は道具、までとは言わないが立派な兵器だ。それ以上でも以下でもない。」

それは少なくとも「人」としては見ない、という事だろうか。

「だが、私にはお前達の力が必要だ。着任したばかりで至らぬ点もあるだろう。だから私がこの職務に慣れるまでは、面倒をかけるかもしれないな。」

「赤い皇帝」は、異世界にて再起動を迎えた。

「よろしく頼むよ、KAN—SENと呼ばれる…諸君。」

鋼鉄の男は、碧き航路に立ったのだ。

「よろしい、ならば冷戦だ」

母港中に衝撃を与えたあの事件からしばらくした後…。

スターリンは日々執務をこなしていたのだが、戦闘の一つも起こらず、演習もKAN—SEN達が各々自主的にやってくれるので、それを許可する紙面に判子を押すだけの単調な作業だった。

そして、現在この母港で一番信用に値するKAN—SEN、ジャベリン。彼女もまた仕事の手際が良く、指揮官でなくてはならない仕事以外はほとんど何とかなってしまう。

そんなジャベリンが一度戻りたい所がある、と言うので許可したところ…

「…暇だ、とにかく暇だ。」

何もする事が無くなってしまった。母港の大半のKAN—SENはすれ違う度に不愉快な視線を向けてくるし、スターリンとて此方から接触を試みる事もしない。

とりあえず外の空気でも吸おうと思い、母港で人の居なさそうな場所を探す。

時刻は昼過ぎ。生前とは違い、朝早いうちに起きて午前中に執務を済ませている。午後はジャベリンに母港の設備を一つ一つ案内してもらっているので、今日は暇だった。

海から風が吹き付ける。心地よいものとは言えなかったが、スターリンとしては悪くもなかった。

(たまにはこうして散歩でもしてみれば、少しは新鮮に感じるかもしれないな…。)

そうして当てもなく彷徨っているうちに、余計に人通りの多い場所へと辿り着いてしまった。

「…仕方ない。戻って寝るか。」

引き返そうとしたその背中に、声が掛かった。

「おい、もしかしてこの間の指揮官か？」

スターリンが振り返ると、金色の髪と白いマントを風にたなびかせる少女がこちらに駆け寄ってきた。

「もしかして、わざわざユニオンの寮舎まで挨拶に来てくれたのか？
なんだ、案外良い人じゃないか！」

少女はニカツとはにかんだ。

「そういうつもりでは無かったが…お前は？」

少しでも話が出る奴を増やしたい。今はその一心だった。

「おっと…忘れてた。私はユニオン所属の軽巡洋艦、海上の騎士クリーブランドだ！覚えていてくれよな。」

（私を嫌う者が多いこの母港で、ジャベリン以外と話す機会があるとは思っていなかったな…物好きな奴もいるものだ。）

「ところで、ユニオン…とは？」

クリーブランドは一瞬呆気にとられたが、すぐに事情を理解したようだ。

「この世界には、主に四つの大きな国家があつて、それぞれ私たちの所属するユニオン、ジャベリンの所属してるロイヤル、重桜、鉄血っていうんだ。」

ユニオンの寮だということ、ここにはユニオンのKAN—SENが住んでいるのだろうか。

「こんな所で立ち話もなんだ、せっかくだから寮舎に来ないか？妹たちにもぜひ紹介したいんだ！」

（暇を潰すにはちよūdいいい。）

まさに願ってもない申し出を快く承諾するスターリン。

「決まりだな、じゃあ行こう！」

前を上機嫌に歩くクリーブランドの後ろ姿を見てみると、先程名乗った「海上の騎士」とやらには見えせず、それはごく普通の少女に近かった。

ユニオンの寮舎は、空と海の青を基調とした広々とした解放感のある部屋で、皆思い思いに休息の時間を楽しんでいた。

「皆、指揮官が挨拶に来てくれたぞ！」

クリーブランドの声に皆が振り向いたが、スターリンの姿を見ると、すぐに表情を陰らせた。

「どうして皆、そんな顔をするんだ…。指揮官は確かに変わってし

まったかもしれない。けど、この人だって根はきつと良い人なんだ！だから皆も…」

その言葉の続きは、スターリン自身が遮った。クリーブランドの肩に手を置き、皆の方へと送り出す。

「落ち着け、概ね予想していた反応だ。…だが、お前には感謝している。ほんの少しでも、私の暇な時間を満たしてくれたのだからな。」

踵を返し、引き返そうとするスターリン。

「待ってくれ、指揮官…！」

クリーブランドの制止も厭わず、扉を開け放つ。

「止めるな、クリーブランド。…門前払いなどされては、私とてお前らと話し合う気など失せるわ。」

(…やはり、こいつ等と関わるのが間違いだったのだ。)

帽子を深く被り、足早に立ち去るスターリン。

その後ろ姿を、呆然と見つめるクリーブランド。側にはクリーブランド級軽巡洋艦の姉妹たち…モントピリア、デンバー、コロンビアの3人。

「…姉貴、言いたい事は分かります。」

「でも、自分はまだ現実を受け入れられないというか…。」

「まだ信用出来ないのよね…指揮官の言葉を。」

他のKAN—SEN達も、クリーブランドを落ち込ませてしまったことを反省していた。

「…私は明日、指揮官に謝りに行く。指揮官にも、皆の事を誤解して欲しくないしな…。」

寮舎を静寂が包む。そんな中、1人の手が拳がった。

「…ラファイーも行く。指揮官、まだ何も悪いことしてない。けど私達は指揮官に冷たくしちゃった。だから一緒に行く。」

ベンソン級駆逐艦、ラファイー。いつも眠そうに見えるその目には、珍しく何か強い意思を感じさせた。

その頃…

遠く揺らめく水平線を見つめるスターリン。その瞳は夕日を写しているのだが、怒りに燃えているようにも見えた。

「…どいつもこいつも、いい加減にしろ！」

足下の石を海へと思いつきり投げる。自分をここへ放り込んだ居もしない異形の少女、オブザーバーへと向けて。

すると老いた生前の体では決して届かない距離まで飛んでいった。深呼吸で息を整え、沸き上がる怒りを何とか抑え込む。

「…私は死んで生まれ変わっても、結局は独りのままか。」

（人というモノを、いつしか信じられなくなっていた。それはここでも同じ。誰も信じられない。）

ソ連時代では、従わぬ者を殺すことで権力を維持してきた。だから私に逆らう者はいなかった。しかしここでは違う。邪魔者を葬り去る事は出来ない。それが不安でたまらない。

（奴らも、私を殺そうと思えば殺せるはずだ。）

その恐怖に、生前から苛まれていた。大粛清の後から、だろうか。常に命を狙われているような、そんな感覚。

故に、今スターリンに近付いてくる「人の気配」にも気付くことが出来た。

咄嗟にそちらを振り向くと、女性が歩いてきていた。その姿に、つい目を奪われる。海風に流れる美しい銀髪に、白い服の上に黒く長いコートを羽織った彼女もまた、KAN—SENなのではないだろうか。

「指揮官…どうした？」

儂くも凜々しい声音は聞いていても心地よいものだろうが、スターリンは油断することもなかった。

「…お前は誰だ。私に、何の用だ。」

「そうか、貴方はこの間の… 私はユニオン所属の空母、エンタープライズ。」

（エンタープライズ…アメリカの空母、だったはずだ。）

思い返せば、クリーブランドというのもアメリカの艦船…。

（ユニオンとはアメリカ艦船から成る国家なのか…！）

あくまで艦船とはいえ、宿敵アメリカのものとはあまり喜ばしくないスターリン。それに構わず、エンタープライズが口を開く。

「私は、ここによく来るんだ。悩みを紛らわせる為に。」

夕日の色に染まる海を見るエンタープライズ。その姿は美しくはあったが、どこか哀愁を感じさせる佇まいだった。

「私は勝利の為に己を磨いてきたが、…戦場から戻るとどうしても思う事があるんだ。」

物申したい事はあったが、ひとまず彼女の話聞く。

「それは、「誰かが勝利する度に、誰かは敗北している」という当たり前の事だ。だが、それは私の心にも突き刺さるんだ。」

思いに耽るエンタープライズ。

戦場では敵に一切の容赦もなく全力で迎え撃つ。だが、戦いが終わると「敵を沈めた」その事実がチクチクと心に突き刺さる。

（もし、自分が沈んだら…とは思わない。全力を尽くして負けるのに悔いはない。だが、敵が必ずしもそうとは限らない。）

勝者の責任。それを背負うことが出来ないまま、重い心残りとなって積み重なり、前に進めなくなってしまった。

「…教えてくれ、指揮官。私はあと、何隻沈めれば良い？」

それは意図せずとも、エンタープライズなりの「助けて」のように聞こえた。

「…分かん。だが一つ言うなら、お前が戦う理由。それが無くなったとき、お前は救われるんじゃないか？」

思った事をそのまま口に出すスターリン。だがそれでもエンタープライズには十分な回答だった。

「…そうか。きつとそうだな。」

夕日を背に微笑むエンタープライズ。

「なら、私の戦いを終わらせてくれ、指揮官！」

出来心というか、かなり適当に言った事がここまで効いた事にたじろぐスターリン。

「はつきりとは言えんが、善処する…。お前が私を信用するというのなら、だな。」

「もちろん、指揮官の命令には従おう。…それともお互いに信じ合える関係、という事か？」

私としては後者の方が喜ばしいが、と笑うエンタープライズ。しかし、それは逆にスターリンが無理だと思っている。

「そこまでの高望みはせん。ただ普通に接してくれれば、指示を聞くだけでも十分だ。」

（お互いに信じ合える関係など、生前誰とも築いたことは無い。この世界でも間違いなくそうだ。）

「そうか。なら、よろしく頼む。指揮官」

そう言つて寮舎の方へと向かうエンタープライズ。スターリンも、すっかり日が暮れてしまったことに驚き、急いで戻る。

執務室へと戻り…。

「息抜きのつもりで外に出たらとんだ目に遭つたな…：そういうえばクリーブランドは大丈夫だろうか？」

（まああいつは皆に好かれる姉貴分タイプだったからきつと何とかなっているだろう。…：そう信じたい。）

淡い希望を抱きつつ、後は夕食と入浴を済ませ、何も無いであろう明日を迎える為に眠りにつく。

そして翌日。

いつも通り午前中に執務を終わらせ、昼食をとつた後…。

（昨日あんな目に遭つたのだ、今日は昼寝でも…）

そんな事を考えていると、不意に扉がノックされた。

「誰だ？」

「クリーブランドだ。少し、時間をくれないか？」

（丁度いい。次会つた時どうすれば良いか考えていた所だからな…。）

「…：良いだろう」

「ありがとう。じゃあ、失礼するぞ」

しかし、クリーブランドと話が出来ると思っていたスターリンの期待は、良い意味で裏切られる事となった。

扉が開き入ってきたのは、クリーブランドだけではなかったのだ。昨日寮舎にいたKAN—SENのほとんどがクリーブランドに付いてきていた。

「急に押し掛けて悪かったな。でも、皆昨日のこと指揮官に謝りた

いって付いてきてくれたんだ！」

(意外だったな。奴等もさして悪い事をした訳でもないのに、揃って謝りに来るとは。)

KAN—SEN達の事を少し見直したスターリン。

「改めて、昨日は不快な思いをさせてすまなかった。」

クリーブランドが頭を下げるのに合わせ、皆も続く。

「あ…ああ、気にするな。私も言っただろう？概ね予想していた反応だど。」

「それでも、あれは指揮官に対して失礼だった。」

そこまで言われれば許さない訳にもいくまい。

「そうか。だが、私はわざわざ謝りに来ただけでも十分誠意は感じている。あまり謝られても余計に困るな…」

ひとまずは許されている、という事実にはっと胸を撫で下ろすクリーブランド。だが、これで終わりではない。

「なあ指揮官、私はあの言葉を信じる。昔とは違うってこと。だけど、今の指揮官も根は良い人って分かってる。だから…指揮官も、私達を信じてくれないか…？」

その場に静寂が流れる。流石に謝罪は通っても、だから信じろというのはまだ早かったかと息詰まる皆。

「やっぱり、まだ早かったかな？すまん指揮官、今のは聞かなかった事に…。」

焦るクリーブランドにスターリンが放った言葉は…

「…分かった。お前達を信じよう。そうでなければ、戦場で命令を聞かないというのも困る。」

スターリンとしても、身近の人間にいつ殺されるか怯え続けるのは神経がすり減るし、KAN—SEN達も人の心を持つのだ、ずっと嫌な上司の下で過ごすのも辛いだろう。

勿論、口だけの嘘である可能性も疑いはしたが、彼女達は嘘をついていないと、確証は無いがそんな気がしたのだ。

「本当か！分かってもらえて良かった…」

喜ぶクリーブランドを見て安心したのか、スターリンの周りを囲む

ようにKAN—SEN達が集まってくる。

「姉貴が信用してるんだ。私だつてそうする。」

「自分、今の指揮官の昔の話をして欲しい!」

「お疲れでしょ? ガムでも噛む?」

「指揮官! この写真、私の妹のインディちゃんです! 可愛いでしょ?」

「指、揮、官♪? 考えてないで遊ぼうよ!」

「…ラファイは構って欲しいと思つてない。たぶん。」

突然の事に混乱するスターリン。だが、ふと部屋の壁に寄りかかり、こちらに微笑むエンタープライズを見つけた。

彼女もこちらに気づいたのか、

「楽しそうだな、指揮官。」

と呟いた。周りのKAN—SEN達の声で聞こえなかったが、何と
言っていたか、スターリンは何故か分かった。

(私はこんな状況を、案外悪くないと思つているらしい)

スターリンのそんな様子に気づいたのか、いつも笑顔のクリーブラ
ンドが、きつとこれまでで一番の笑顔で言った。

「これからもよろしくな、指揮官!」

「花より団子、紅茶よりウオツカ」

最近執務を終えた午後が楽しくなってきた。

なぜなら、ユニオンのKAN—SEN達が話し掛けてくれるようになったからである。本国から戻ってきたジャベリンはとても驚いていたが、良い変化だと喜んでくれた。

今日はジャベリンの友達であるユニオン駆逐艦、ラフィーと執務室で昼寝をしている。

「…zzz」

ちょうど昼食をとり、眠くなってきた頃に突然現れてはソファーに転がり寝始めたので、スターリンも椅子で眠る事にした。

（こんな風に仮眠できるだけ、生前…いや、前世よりかはマシかもしれないな。）

しばらくラフィーの寝顔を眺めながら姿勢を楽にすると、窓から差し込む昼下がりの暖かい日差しにやられて、すぐ眠りに落ちてしまった。

「指揮官、ラフィーちゃんを知りませんか…って、ここにいた！遊ぼうと思ってたけど、まあいつか！」

そこでジャベリンも、スターリンが考え事をしているのではなく眠っている事に気付いた。

「指揮官もお昼寝ですか。意外と可愛い一面があるんですね…さて、じゃあ私もお昼寝しよっかな。」

いくつかあるソファーのうちラフィーに近いものを選び、横になるジャベリン。今日は三人でお昼寝タイムである。

そして小一時間ほど経った頃、電話が鳴った。目を覚ましたスターリンが電話に出ると、抑揚の無い小さな声が聞こえてきた。

「…指揮官、女王陛下がお呼びです。明日の早朝、迎えを出しますので。くれぐれも寝坊などなさらないように」

全く状況がつかめず困惑するスターリン。

「突然呼び出しておいて何だそれは…。せめて事情だけでも聞かせてはくれないのか？」

「…話はこれだけです。詳細は明日説明しますので」
それだけ言うとぷつり、と電話は切られてしまった。
ソファの方をチラツと見ると、ラフィーといつの間にかやってきたジャベリンが仲良く眠っていた。

幸せそうな寝顔を見てみると、つい頭を撫でたくなってしまう正体不明の欲求が湧き上がる。

「いかん！私はそういう趣味では断じてない！…とも言い切れないのか？いや、そんなはずはない！」

（前世でも子供にはいつい気を緩めてしまう節があつたが、それはきつと庇護欲とかそういうったもので、決して幼年幼女が好きな訳ではないはず…。）

眠るラフィーとジャベリンを眺めて悩んでいる時点でそれはもう事案の香りがしなくもないが。

「いやいや、そうじゃない！…女王陛下とか言っていたが、一体どこだといった？」

椅子に戻り、考え込むスターリン。

（ユニオンの例からすると、前世で思い当たる節があるといえは…イギリスだろうか？）

かつて英国海軍は世界の最前線を行っていた。戦後こそアメリカが強力になってきたが、二次大戦頃の海軍戦力は「ロイヤルネイビー」と呼ばれ恐れられた。

（となると四大国家の…ロイヤルだったか？きつと、紅茶を嗜む淑女だらけの堅苦しい国に違いない。）

「後でロイヤル出身のジャベリンに聞いておこう。」

となると、先に身支度をしておかねばならない。明日の朝にやったのでは間に合わない。

適当に必要な物をトランクに詰め込み部屋の隅に立て掛けておく。

「…？あ、指揮官。おはようございます」

起きたジャベリンが目をこすって挨拶する。

「起きたか、ちようどいい。今さつき、電話が来て呼び出されたんだ。」

女王陛下がお呼びだとか何とか…」

その言葉を聞いた瞬間、ジャベリンの顔から眠気が吹き飛んだ。：ように見えた。

「女王陛下からお呼び出し!?ほ、本当ですか指揮官!だとしたらやっど…」

「とてつもない慌てようだが、一体どうした?」

「どうやらその声でラフィーも起きたらしく、のっそりとソファアールから起き上がる。」

「…ジャベリンはロイヤルの女王様に、指揮官はいい人だから協力して欲しいって頼みに行つた。ラフィーも思う。いい人。」

(なるほど、この間本国に戻りたいと言っていたのはその為か…私の為にわざわざ…)」

思わず涙腺が熱くなるのを堪えながら話を聞く。

「それで、指揮官の事を信じてくれませんかとお願ひしたんです。そうしたら、「そこまで必死なら仕方ないわ。考えておいてあげる」とだけ仰られて…。」

「やつと女王が指揮官の事を理解しようと動いた訳だ。」

しかし、スターリンからすれば納得いかない。

「なるほど、つまり私は女王の信頼を勝ち取らねばならないと。…何様のつもりだ、この私に指図するなど!」

スターリンが急に声を張り上げたので、驚いた二人の肩がビクツと震える。

「悪いが却下だ。元からそんな奴らを作戦で使おうとは思わん!…何が「考えておいてあげる」だ、私は一言も信じてくれなどと頼んだ覚えはない!」

仕方ないから従う、等といった考えでは命令もまともに聞きはしないし、戦場でも真つ先に死ぬ。そんな部下とも呼べない役立たずは切り捨てるのが道理だろう。少なくともスターリンはそう思っている。

自分の為に苦勞してくれたジャベリンの頭をそつと撫でる。お前は悪くない、と安心させるためでもあるが。

その真意がわからないラフィーも、スターリンの空いている片手を

引き、撫でて欲しいとねだる。

「…さっきの言い過ぎだな。すまん。…だが、国のトップがそんな奴では協力する気にもなれん。」

ジャベリンの胸中では、複雑な思いが渦巻いていた。

(…指揮官の言いたい事もわかる。陛下も、威勢を張る相手が悪かったと思います。けれど、やっぱりロイヤルの艦隊は強いから、必ず指揮官の役に立ちます!)

「指揮官も陛下も、お互いにきつと誤解なさっているんだけど思います。一度会って、話し合ってみればいい人だと分かりますよ!」

「ラフィーも。…最初は変な人だと思った。けど、今は撫でてくれる優しい人って分かった。これって、会ってみないと分からなかった。それと同じ。」

二人の言葉で、ようやく頭が冷えた。百聞は一見に如かず、というやつだろうか?…いや、少し違うか。

「…そうかもしれないな。ありがとう。」

作戦成功、とばかりに顔を見合せ笑う二人。スターリンは何となく、もう一度二人の頭を撫でてやった。

「こうやって撫でてくれるのは、今の指揮官だけなんですよ?何だかとっても安心するというか…。」

「前の指揮官、皆に優しくかった。でも今の指揮官、ラフィーにとっては前より優しい。…もつと撫でて」

(やはり、子供は好きだ…。いや、この子達は…?)

子供と呼ぶには微妙な二人。でも先入観なしで接してくれる、子供にしかない純粋な心があればいい。…という事にしておいた。

「そうと決まれば今日は早寝だ。迎えは朝早いらしいからな。寝過ぎしたらそこで終了だ。」

翌朝…。

日が昇る前に起床し、身支度を済ませて待っていると、執務室の扉がノックされた。

「…女王陛下の命で参りました。ロイヤル軽巡洋艦のシエフィールドと申します。」

昨日電話を掛けてきた声と同じだった。どんな面をしているのか
精々拜んでやろうと扉を開けると、そこには…。

メイドがいた。

表情こそ無愛想なもの、その佇まいはメイドそのもの。あまりの
出来事に一瞬思考が停止してしまった。

「あ、ああ。わざわざ迎えとはすまないな…。」

「異世界から来たとの事で、ロイヤル本国の位置も存じ上げないだろ
うという陛下のご厚意です。…さあ、行きますよ。」

表情一つ変えずに先を行くシエフィールド。早速ご機嫌取りを止
めたくなったスターリンだが、そこは必死に我慢。

…と思っていたが、

「…私の前では変に取り繕わなくとも結構です。私はメイドとして、
指示を聞くだけです。」

「…見透かされていたとはな。その方が助かるが。」

意外と、難儀なのは女王だけかもしれない…。

その後は案内された場所に停泊していた船に乗り込み、ロイヤルへ
と向かった。

暇なので、時間を潰す為に質問を投げ掛けてみた。

「ロイヤルの女王って…どんな奴なんだ？」

その問いに、少し間を置いて答えたシエフィールド。

「女王陛下は…かなり自分第一なお考えの方です。しかしそれは女王
として当然の事で、私達メイド隊もその考えに従うだけです」

思った通りの回答だった。絶対的な権力を持つ女王と、お付きのメ
イド達。これでは恐らく説得のしようがない。

すると今度はシエフィールドから質問が。

「指揮官は私達の事、どのように見てらっしゃるのですか？…勿論こ
こでの事は内密にしますので、ありのままを話して頂いて結構です」
(…ほう、そう来たか。)

これはいわゆるお互いの信用度チェックだ。

まあ実際は内密な訳がない。しかしシエフィールドを信じて本当
の事を言えるか、嘘をつくのか。シエフィールドも私の言葉を信じる

事が出来るのか。

だが隠し事はしない。後々面倒な事になるし、この発言の結果女王に「協力は無理だ」と言われたならそれまでだ。

「私はお前達の事…そうだな、部下というのが一番近いだろう。道具までとは言わん。だが仲間とまでは言えない。これが答えだ。」

「…あなたは最初、私達を兵器と言いましたが、今は違うのですね？せめて人並みには扱おうと。」

「ああ。あの母港で過ごし、少し考えが変わった。」

ジャベリンやユニオンのKAN—SEN達と過ごすうちに、彼女たちもまた一人一人「感情」があるのだと知った。

いや、最初の日から知ってはいたが、それを現実として受け止められなかったから、さほど重要視していなかった。

「女王が何と言うかは分からんが、これで満足か？」

してやったりという表情のスターリン。

「…見透かされていたんですね。私も」

その時、彼女の無表情だった顔が少しだけ笑った。

(…思っていたより話が分かるみたいだな。ジャベリンとラフィーにはやっぱり感謝しなくては。)

窓の外を見ると、朝日に照らされて輝く海と、レンガ造りの建物が立ち並ぶ港町が見えた。

「ここから馬車で王宮へ向かいます。…くれぐれも女王陛下の前では無礼を働かないように。せっかくのチャンスが無駄になりますよ？」

「分かっている。折角ここまで来たのだ、一つ意表でも突いてやろうか。」

つくづくメイドというのは切り替えの早い生き物だ。

既に用意されていた馬車に乗り込み街中を走っていると、遠目に城らしき建物が見えてきた。

(今時、王宮などと…悪趣味だな。いや、モスクワの「赤の広場」も大して変わらんか。)

ブーメランっぽい事を心中で思いながら、しかしその時は刻一刻と近付いている。正直お役御免だが外交官など居ないので仕方ない。

「本日は陛下と話し合って頂き、親睦を深めて頂きます。指揮官がどういった方なのか知りたいと。」

（本当はさつきシェフィールドが聞いてきた、「私達をどう思っているか」の事だろうな…さすがに最初からお前達は兵器だとか言うのはやり過ぎたか？）

なんて事を考えているうちに、王宮へ到着した。

手入れのされた広大な庭園と、豪華絢爛な装飾の施された城内を通った。はつきり言って居心地は悪かった。

先導してくれたシェフィールドが、一際大きな扉の前で止まった。これはもう扉というより門のレベルだ。

シェフィールドが「少し待っていて下さい」と言っただけのメイド隊と色々話し合っていたが、戻ってきて少しすると、扉が開いた。

「陛下、指揮官が到着なされました。」

「良いわ、入りなさい！」

やけに甲高い声の返事が帰ってくると、シェフィールドに合わせて謁見の間へと入る。

レッドカーペットと階段の先には…玉座に座る少女と側近らしき人物とメイドがいた。

（…あれが、女王？）

見た目はこの場の誰よりも幼い。王族特有の威張り散らかしてる感はあるが、威圧感を感じない。

「よく来たわね指揮官！私がロイヤルネイビーの象徴たる超弩級戦艦、クイーン・エリザベス様よ！」

王笏を掲げ、高らかに名乗る女王エリザベス。

「私は陛下の側近として仕える戦艦、ウォースパイトよ。…あなたがロイヤルの未来にとって必要な人物か、しっかり見定めさせてもらうわ。」

「メイド長を務めております、軽巡洋艦ベルファストと申します。以後、お見知りおきを。」

一通り自己紹介が終わった所で、早速話を切り出す。

「…あなたの考えを聞かせなさい！仲間として接してくれるの？それ

とも私達を道具として使い潰すつもりかしら？」

予想通りだった。やはり彼女達は、優しかった前の指揮官と私を重ね、相対的に私を悪く見ている。

だから私の真意が知りたい。自分達がどう思われているのか知りたい。私が最初に言った、「道具とまでは言わないが、立派な兵器だ」という言葉も、彼女達の不安を掻き立てている。

「嘘をつけば、すぐに分かるぞ？ベルファストはそういうのに鋭いからな」

(結局他力本願かい、側近様…。)

「わ、私ですか？…まあ、その通りですが…。」

(困ってるぞメイド長!?)

「いまいち噛み合わないな…。」

ついつい呟きが漏れてしまい、ハツとするが…

「ふふっ、指揮官の緊張を解してくれたのね？二人とも良い働きね！」

『!?…え、ええ。そこに気づくとは流石陛下、ありがとうございます。』

あ、あはは…。」

(絶対不自然だよな今のやり取り…?)

しかしウォースパイトとベルファストから有無を言わさぬ視線の圧が掛けられているのでこれ以上は触れないでおく。

「…質問に答えるとするなら、私としては仲間として接したい。と言わせてもらおう。」

皆の表情が険しくなるが、無理もない。以前とは言っている事がまるで違う。当然説得力は皆無だろう。

「この短い間にだいぶ変わったわね。でも、その言葉だけじゃまだ足りないわ！」

「ですが、嘘をついているようにも見えません。少なくとも友好的な姿勢は感じ取れますが…。」

流石女王を名乗るだけはある。やはり一筋縄では行かないか。ウォースパイトも見る目はあるな。こちらを凝視して喋らないメイドが怖い。

「指揮能力に関しては心配しなくても構わない。それでも前世は最高

指導者だったものでね。」

戦闘の指揮はほとんど赤軍元帥たちに任せていたが。

「そちらが協力してくれるというならこちらも誠意をもって接するし、無下に扱うこともしない。」

三人はなにやらコソコソと話し合い始めた。状況が状況なので怖いっただけありやしない。

やがて結論がまとまったのか、二人は姿勢を正してエリザベスの言葉を待つ。

「指揮官の意志は伝わったわ。けれど、いきなり全幅の信頼を置く訳にはいかないわ！だから、これから少しの間様子を見させてもらうわね！」

「つまり、この件は保留という事だな？」

言いたい事は分かったが、具体的に何をすれば良いのかが分からず一時保留と受け止めてみる。だが、

「いえ、私が期間中そちらに赴き、指揮官の身の世話をすると同時に観察させて頂きます。」

ベルファストがスカートの裾を持ち上げて一礼する。

(それって要は監視じゃないか……)

「これで良いわね！それじゃ頼んだわよ、ベルファスト！指揮官も、メイド長が完璧過ぎて仕事サボるんじゃないわよ！」

まあ、丸く収まったなら良しとしよう……。これ以上話を引き延ばして面倒事になるのも御免だ。

王宮を後にするスターリンとベルファスト。

「では改めて、よろしく願いいたします。」

「ああ……よろしく頼む。」

「お疲れのようですね。紅茶をお用意しましょうか？」

「…出来ればウオッカとか無いかな？」

「北方連合から取り寄せましょうか？」

「北方…連合!?何だそれは！」

スターリンの本能が訴え掛ける。北方連合というワードに、何故か血が騒ぐ。

「北極近くに位置する、全体主義を掲げるコミュニスト国家です。敵の本拠地に近く、中々こちらの作戦行動には参加出来ませんが…」

「コミュニスト…国家!?!」

(まんまソ連じゃないか…!)

「興味がございましたら、今度挨拶に行かれては?」

「ああ!…生前私が治めていた国に似ていてな。」

今となってはあの寒さが恋しい。

「では、連絡はしておきます。」

…いい知らせを聞いたスターリンだが、北方連合に行くのは少し後の話である。

「初陣」

ロイヤル女王、クイーン・エリザベスとの話し合いの結果、協力するのは様子を見てから、スターリンが指揮官として信用出来るか見定めてからとなった。

そのお目付け役として、メイド長のベルファストが母港にやってくる事となった。

「…あー指揮官、お帰りなさい！」

夜も遅くなってきた頃、スターリン達が執務室に戻ってくるとジャベリンが出迎えてくれた。

「協力の件だが、しばらく私を観察して、指揮官としての能力等を見定めてから決める事になった。」

「そうなんですか…。ひとまず話し合いは出来たみたいで、良かったですー！」

ほつと胸を撫で下ろすジャベリン。

「それで、お目付け役としてだな…。」

「この私が来た次第です。」

ジャベリンもロイヤル所属のKAN—SENなので、ベルファストの事は知っている。あまり面識は無いが。

「へえ、ベルファストさんが…。」

声のトーンが下がったジャベリン。スターリンはジャベリンの耳元に顔を寄せた。

「…もしかして苦手だったりするのかな？言われてみれば手厳しそうな感じの奴だが…。」

「違うんです…。ベルファストさん、何でも完璧にこなせちゃうから、私の仕事無くなっちゃうなあって。」

(なるほど。もつともな悩みだが、それほど私を手伝いたいと思ってくれてるのか…。)

スターリンはジャベリンの頭をそつと撫でてやった。

「心配するな、お前が私の力になりたいと言うのであれば、遠慮せず訊いてくれて構わん。」

「本当ですか!?ありがとうございます!」

顔を上げ、いつもの明るげな表情を取り戻したジャベリン。そんな二人のやり取りを知らないベルファストからすると、単に落ち込んだジャベリンをスターリンが慰めただけに見えるだろう。…いや、実際の内容もそうなのだが。

「指揮官様は、意外とお優しいんですね。」

「自分でも意外だよ。少なくとも生前は、他人を慰める事など無かったものだ。」

どこか遠い目をして語るスターリン。ベルファストはそんな様子が妙に気になったが、余計な詮索はやめようと判断した。

「…さて! 私は今日一日空けていた分の仕事を片付けてしまうから、ジャベリンはもう戻っても良いぞ。」

「はい! おやすみなさい、指揮官。」

ジャベリンが執務室を後にすると、ベルファストにも声をかけた。「今日は特に手伝って欲しい事もない。お前も休んでいて構わないが? 部屋は私のを使ってくれ。明日決めよう。」

「いえ、私はメイドですから。指揮官様の一日の活動が終わったのを確認するまでが業務のうちです。」

表情一つ変えず言葉を連ねるその様は、やはり完璧主義の手厳しいメイド、という印象をより強いものにした。

それから一時間ほどが経った…。

ただただ静かな時間が過ぎていく。規則正しく時を刻む秒針の音と書面の上を走る筆の音が、その場を支配していた。

ふと、ベルファストが口を開いた。

「そういえば、私は貴方を指揮官様とご主人様、どちらで呼べばよろしいのでしょうか。」

(さつきは指揮官様と呼んでいたが…: どうでも良い事か)

「お前の呼びやすい方でいい。」

「ではご主人様と。…ところでご主人様にも、お願いしたい事がございます。」

と訊いてはみたものの、スターリンの返答を待たずしてベルファス

トは続けた。

「ご主人様も、私の事を名前で呼んで頂けないでしょうか。面倒というのであれば、強制はしませんか…。」

「別に構わないが…そちらこそ意外な所に拘るのだな」

「それは…」

表情を曇らせるベルファスト。そんな様子が珍しかったため、スターリンは彼女を問い詰める。

「今のベルファストは、今日一日とは明らかに様子が違う。名前で呼ぶことに何か深い理由でもあるのか？」

(ご主人様、何だかんだ言っちゃんと名前で…)。

今度は少し微笑んだベルファストだが、表情はすぐに戻る。どうやら観念したのか、理由を話し始めた。

「…ご主人様は、人柄は違うとはいえ姿は前の指揮官と同じです。前の指揮官はとても優しいお方で、私達を温かく名前で呼んで下さったのです。」

「だから、そいつと姿形が同じ私に『お前』と呼ばれるのが耐えられない訳か。」

「…はい。ご主人様は悪くないというのに、私が…」

だがその言葉の続きは、スターリンに遮られた。

「確かに、私はヨシフ・スターリンだ。そいつとは違う。誰にでも優しくしてやれる訳ではないし、前の指揮官を私に重ねて、勝手に失望されても迷惑極まりない話だ。」

それはこの世界に来て、指揮官として一番に思った事だった。「一体私の何を知っているんだ！」と叫びたくもなかった。

「だが最近、少しは言われている事の意味が分かってきた。何も知らなければ、裏切られたと思うと」

だから、少なくとも自分では優しくしているつもりだ。単純に喋れる奴が多くなって、気が楽になっただけかも知れないが。

「…私は人間不信だな。だか不器用なりに、信頼される指揮官になろうとしている。だからベルファスト、お前もあまり固く構えないで欲しい。」

「ご主人様…。」

(初日の演説の時とは全然違いますね…私達が信じれば、そちらも変わってくれるという事でしようか)

そもそも信頼とはお互いの気持ちがあつての話。私達を信じて欲しいと言つておきながら、私達はご主人様を信じられないなどおかしいにも程があります。

「…ええ。少し印象が変わりました。少なくとも、私達の事も考えていらしたのでですね。」

「少しは、私を信じてくれる者もいるからな。なら、それなりの対応をしてやるのが道理だろう?」

スターリンは机の上を整理して立ち上がるとコートを脱いで軽い服装になり、ソファアに横たわった。

「今日の仕事は片付いた。ベルファストも休め。」

「ご主人様は、ここでお休みに…?」

「ああ。ベルファストの部屋は明日にでも探してみよう。今晚は私の部屋を使うといい。」

そのような事は出来ません、と反論しようとしたが、スターリンはそれ以上は相手にしてくれなかったため、これもご厚意のうちと受け止めざるを得なかった。

結局、その日は指揮官の部屋で寝たのだった。

…翌朝。

スターリンが日の光で目を覚ますと、既にベルファストはいつものメイド服姿で、カーテンを開け放っていた。

「…いつから起きていた?」

「一時間半ほど前に。起きてから着替えて、身だしなみを整えて、ご主人様の本日の執務の用意などをすると、あつという間に経ってしまうものです。」

現在朝の7時。

「5時半起きか…夜型の私には想像もできん。」

まだうとうとする頭をどうにか働かせ、コートを羽織り、帽子を被って席につく。

「ただいま朝食をお持ちしますので、少々お待ち下さい。飲み物はコーヒーでよろしいですね」

そう言って一度執務室を後にしたベルファスト。

「よく早朝からああもきびきび動けるものだ…。」

あまりの仕事っぷりにジャベリンが自信をなくすのも分かってしまった。

その後朝食を食べた。これもまた美味くて、何だかエリザベスの言っていた「ベルファストがいるからって怠けるな」という忠言を思い出した。今後はこの言葉を唱えて頑張ろう。

しばらくすると、ジャベリンがやってきた。スターリンは手招きして、耳元で今朝の事を話した。

「ジャベリン、手伝いたいなら遠慮せず訊いてくれと昨日言ったが、私はどうやらベルファストを甘く見ていたようだ…。」

「ベルファストさん、何事も頼む頃には既に終わらせてますからね…。流石メイド長って感じですよ。」

その後、午前中の執務が始まった。指揮官というものはどうしても将校に命令を下すイメージがついてくるものだが、それはあくまで戦時中の話であって、普段は書類仕事ばかりなものだ。流石に戦闘が起こって欲しいまでとは思わないが、こうもデスクワークばかりだと体が痛むし、せつかく積んだ第二次大戦での経験も鈍ってくる。まあ作戦立案はほとんどジュークコフら赤軍元帥がしていたのだが。

「…ふう。書類は大方片付いたな。全く、前世での慣れがあるとはいえ、やっぱりこの仕事は疲れるな。」

大きく伸びをしてしばらく一休みしていると、ベルファストが見覚えのある瓶を持ってきた。

「昨日仰っていたウオツカを取り寄せました。…しかし一段落ついたとはいえ、執務中にこのような度の強いお酒を飲んでも大丈夫なのでしょうか?」

そんなベルファストの心配をよそに、ウオツカをラツパ飲みするスターリン。久しぶりの祖国の味に、身体中の疲れが吹き飛んでいくのを感じた。

「これが無くてはやってられん！ウオツカは命の水とも呼ばれ、ソ連人民の燃料とも言える代物だ！」

以前の指揮官はもちろん、一日過ぎた間に見たスターリンのイメージともかけ離れたハイテンションに困惑を隠し切れないベルファストだったが、とりあえずウオツカが好きなのは伝わった。

(…定期的に仕入れておきましょう。お疲れの際にはこれが効きそうです。もつとも、私と晩酌というのはさすがに度が強すぎて飲めませんが、ラフィーさんあたりなら…?)

あつという間に瓶の半分を注いだグラスを飲み干してしまったスターリン。本来ならこの量を一気に飲みするのはキツイが、久しぶりのウオツカと若返った体という事でついやってしまった。

(そういえばこの世界に来てからまだ1週間も経っていない。色々あり過ぎて、結構な時間が過ぎたと思っていたのだが…)

果てしなく広がる青い空に、これまでの日々を振り返るスターリン。初めは突然の転生と人間不信が合わさって、双方ギスギスした関係が続くと思っていた。

しかしジャベリンがそれを覚えてくれた。ラフィーも、クリーブランドたちユニオンのKAN—SEN達も。みんな以前の指揮官との変化に戸惑いつつも、こちらの信頼に応えてくれた。

クイーン・エリザベスらロイヤルのKAN—SENも、一応は協力する素振りを見せてくれた。何とかして信頼を勝ち取り、彼女らが誇る「ロイヤルネイビー」の肩書きに恥じぬ活躍をしてみらうつもりだ。(…結局、私はこの世界と彼女たちに期待しているのかもしれない。前世では得られなかった、「幸せ」というものを。)

今度はグラスに口を付けず黙りこくってしまったスターリンを心配するベルファスト。突然異世界に放り出され、艦隊の指揮官になれるなどと、いくら前世で似たような仕事をしていても、その苦労は心中察するところだ。

「…」主人様、何か困った事があればこのベルファストがお力になります。ですからどうか、無理だけはなさらないように。」

「そうか。そう言ってくれると助かる。」

そこからは特に喋る事もなく、黙々と残りの書類を片付けていた。ベルファストもその様子を見守っていた。

しかし、その静寂は突如として破られた。

ドオオオン!!と轟音が響き外を見ると、港湾設備のある方から黒煙が上がっているのが確認出来た。望遠鏡を覗くと、地平線に黒い謎の艦隊が虚空から出現していた。

「あれは…?」

「セイレーンの艦隊です！この星に現れ大部分を占拠した、私達KAN—SENが作られる理由となった人類の敵です！」

敵襲と知るやいなや、スターリンは放送機器に駆け寄りすぐに指令を出した。

「総員、出撃準備！繰り返し。総員、出撃準備！これは演習ではない！空母は誰か偵察機を飛ばしてくれ！」

けたたましいサイレンの音と共に、KAN—SEN達が艤装を展開し臨戦態勢へと移る。

「すまないが集まってブリーフィングをする余裕は無い。私の大まかな指令を基に、臨機応変に対応してくれ。頼む！」

突然の敵襲ではあったが、スターリンは高揚感に包まれていた。1945年の終戦から味わうことのなかった、この感覚。

ひとまず沿岸防衛に巡洋艦中心に編成した艦隊を配備すると、敵主力と思われる戦艦と思しき艦から次の砲撃が飛んできた。しかしその砲弾は防衛用の艦隊ではなく、この執務室を狙っていた。

「狙いはここか…！」

身構えるベルファストだったが、軽巡である彼女に戦艦主砲の砲弾を撃ち落とすのは難しいのでは…

と思われた次の瞬間、その砲弾は執務室に届く前に爆散した。爆風で窓ガラスが割れたが、ベルファストがそれを庇った。

割れた窓から下を見ると、展開した主砲から白い煙を吹くユニオン戦艦、サウスダコタ級の3人がいた。

「サウスダコタ、マサチューセッツ、アラバマ…その調子で頼んだぞ！」

3人は未だ次弾に備え空を睨んでいたが、サウスダコタは振り返らぬまま言った。

「任せて。指揮官は僕達が護る！」

「頼りがいのある背中だな…よし、私もこうしてはいられん。偵察機が戻り、敵艦隊の戦力が判明し次第、作戦を立てて攻勢を掛けるぞー」
ついに遠くからも砲撃音が聞こえてきた。沿岸防衛部隊が交戦を開始したようだ。そして、偵察機がついに帰投したようで、ユニオン空母、エセックスがやってきた。

「指揮官、現在の敵戦力はこの通りです。しかし、セイレーンは倒しても倒しても虚空から現れるので、実際にはもっと多く見積もった方がいいかと。」

「苦労だった。悪いんだが、エセックスにはそのまま沿岸防衛艦隊の援護任務に当たって欲しいんだが、頼めるか？」

「は…はい！任せてください！指揮官の期待、絶対に裏切ったりはしません！」

彼女にとって活躍の機会を貰えるのは願ってもない事だった。エセックス級の空母はどれも優秀であったが、やはりヨークタウン級空母、エンタープライズの武勲が頭一つ抜けており、彼女もそれを気にしていた。

「エンタープライズ先輩…いつか必ず、あなたに負けない空母になってみせます！」

白鷺の旗と共に、彼女は海上を駆けて行った。

スターリンはエセックスからの情報を基に、攻勢開始の命令を出した。

「駆逐艦を主軸とした機動打撃部隊で前線を押し上げろ！それとは別に現在交戦中の沿岸防衛部隊にも増援を当てる。戦艦は射程を活かしたロングレンジ砲撃で敵主力の大型艦を撃破してくれ！空母はそれぞれの戦線で援護を頼む。手が空いたらでもいいが、主力への攻撃にも注力してくれ！」

再び敵戦艦からの主砲弾が近付くも、サウスダコタ級の3人が撃ち落としてくれた。

「言っておくがくれぐれも無理だけはするなよ。絶対に全員帰ってこい！それでは…全艦、攻勢開始！」

合図と共に、編成されたKAN—SEN達が一齐に出撃し、砲が火を噴き、魚雷が海に飛び込み、艦載機が飛び立った。長時間の戦闘に疲弊していた沿岸防衛部隊にも増援と補給が届き、戦線の崩壊は免れた。

ひとまず落ち着いたスターリンだが、ベルファストがいつの間にかいなくなっている事には気付かなかった。

「…では陛下にはそのようにお伝えして頂いてもよろしいでしょうか、ウォースパイト様。」

「分かったわ。…大丈夫、きっと陛下も分かっているはずよ。心配しないで、ベルファスト。」

「ありがとうございます。それでは。」

受話器を戻し、深呼吸する。そして足早に執務室へと戻った。

そこには望遠鏡を覗き、指示を出すスターリンの姿があった。

(状況判断能力には長けているようですね。各KAN—SENの能力を活かした指揮も出来ているようです。演習の書類やデータ等を良く観察されているのでしょうか。)

しかしその顔色から、戦況は芳しくない事が伺える。奇襲攻撃だったため急ごしらえの作戦しか用意出来なかった上に、相手は未だ謎に包まれたセイレーンの艦隊。そして何より、これが指揮官の初陣なのだから。

「打撃部隊の損耗が予想以上に激しいな…奴らを押し留められてはいるものの、数の上では不利だ。このままではジリ貧になり、いずれ戦線が維持出来なくなる…！」

無茶な攻勢は戦力の低下を招き、相手に反撃の糸口を掴ませる事になる。しかし相手は無尽蔵の戦力を有していると考えられる。よって後退する事は相手の攻勢によって突破口を開かれるリスクがある。

頭には死守命令の文字が一瞬浮かんだが、彼女達は畑から採れるとまで言われたソ連兵とは違う。失えば補充は出来ないのだ。大体このまま守ってもいつかは落ちる。

「とにかく大破して戦闘不能だけは絶対に避けたい。撤退する際は戦線に穴を開けず、何とかバランスよく退いてくれ！」

昼前に始まった戦闘は夕日が空を赤く染めてもなお続いた。当初の予定とは大きく外れ、押し込むどころか徐々に後退し続け、既に港内は敵戦艦の砲撃で火の海になっていた。

（幸い撃沈したKAN—SENは今の所いないが、このままでは陥落するのも時間の問題だぞ…！何か、何か手は無いか！）

すると、明らかに敵戦艦の物とは違う大口径の砲撃音が鳴り響き、なんと敵戦艦が轟沈した。さらに大量の艦載機がセイレーンの艦隊を爆撃し、損傷を与えていった。

スターリンの目に映ったのは、セイレーン艦隊の後方、逃げ道を塞ぐように展開した：ロイヤルネイビーだった。

前線に送ったベルファストを見ると、榴弾を撃つ手は休めないものの、こちらへ一瞬振り向き、「後は任せました」と言った。聞こえはしなかったものの、そう言っていた気がした。

「ベルファスト…お前って奴はやっぱ完璧だな！」

ロイヤル戦艦にして世界に名だたる「ビッグセブン」に数えられる姉妹、ネルソンとロドニーの16インチ主砲が放たれ、直撃した敵艦は例外なく撃沈した。

イラストリアス級空母の3人による航空支援は目に見える戦況の変化をもたらした。上空の敵艦載機はほぼほぼ消え去り、制空権を奪取した後、容赦ない爆撃を降らせていた。

女王の側近である弩級戦艦ウォースパイトは、たとえ高速で動き回る駆逐艦に対しても凄まじい精度で主砲弾を命中させ撃沈した。

駆逐艦、巡洋艦、戦艦、空母のどれをとっても強力な海軍だった。絶望的だった戦況はいつの間にか包圍殲滅の流れへと変わっており、セイレーン艦隊はみるみるうちにその数を減らしていった。

やがて戦力を投入するだけ無駄だと判断したのか、増援がピタリと止み、何隻かは虚空へと逃がしてしまったものの、大半の敵艦隊は殲滅された。

長い戦いの余波で壊滅した港に駆け付けたスターリンは、激戦を戦

い抜き帰還したKAN—SEN達に礼を言っただけで回った。そしてク
イーン・エリザベスの元へ向かい、深々と頭を下げ、感謝の意を述べ
た。

「増援、感謝する。ロイヤルネイビーの力、存分に見せてもらった。本
当に…ありがとう！」

「ふふん、ロイヤルネイビーの実力はまだまだこんなものじゃないわ
！あなたも少しはやるじゃない、ベルファストから連絡が届いてから
私達が到着するまでずっと耐えていたのでしょうか？ たった1人も失
わずに。素晴らしい功績だわ！」

ウォースパイトも頷いている。するとそこに、先程は見えなかった
3人、ジャベリンに肩を預けたラフィーとベルファストがやってき
た。

「指揮官、無事で良かったです！」

「…ラフィーつかれた。」

スターリンは安堵し、2人を抱き締めた。ベルファストはエリザベ
スの元へと戻り、何かを話している。

「2人ともよく頑張った！よく戻ってきてくれた！…そして、無理を
させてすまなかった！」

「指揮官の方こそ、誰もやられちゃわないように作戦を立てるのは難
しかったですよね！私達がこうやって戻ってこれたのも、指揮官の作
戦とロイヤルの皆さんのおかげです！」

「みんながんばって、みんなすごい。でしょ？」

「…そうか。そうだな！私も、少しは頑張れたか。」

（死を惜しまず突撃させて勝つ事しか知らなかった私にしてはよく
やったな。）

2人の伸ばした手に頭を撫でられ、ようやく全身から力が抜けてリ
ラックスしたスターリン。もう一度改めて礼を言おうとエリザベス
に向き直ると、向こうから声がかかった。

「それで、協力の件だけでも。」

まさかその話を振られるとは思わず、無意識に背筋が伸びるスター
リン。心臓が早鐘を打つ。いくら何でも決定が早すぎやしないかと

焦るも、そんなことを言う訳にもいかない。

「ロイヤルは、貴方を指揮官として歓迎するわ！この砲火は貴方に捧げ、世界の敵に放ってやろうじゃない！」

「は…はあ。」

あまりの急展開に啞然とするしかない。

「何よ、その反応は！協力してあげるって言ってるのだから、素直に喜びなさいよ！」

「わ、分かった。これからもよろしく頼む！」

エリザベスは満足そうに頷くと、踵を返して歩き始めた。

「じゃあ、そういうことで！ウォースパイト、帰るわよ！」

「え…」

見るとウォースパイトはいつの間にかこの場から消えていて、ユニオン戦艦にして「ビッグセブン」に数えられるコロラド級戦艦の一人、メリーランドと主砲の精度対決をしていた。

「なんだ、もう帰っちゃうのか。今回はあたしの勝ちだな、ロイヤルの嬢ちゃん！」

「くっ…次は絶対に負けないわ！あっ、お待ちください陛下ー！」

その様子を座り込んで笑うスターリンの元に、ベルファストも別れの挨拶を言いに来た。

「ほんの短い間でしたが、ありがとうございました。とても楽しい時間でしたよ。貴方を見直すきっかけにもなりましたし」

「こちらこそ世話になったな。あまりに完璧だったもので、明日からベルファストがいなくなると大変だな。」

「またまたご冗談を…とは言わせない自信がございます。ですが、次はジャベリンの番ですよ。」

「は…はい！今日一日見てきたベルファストさんみたいに、精一杯頑張ります！」

「ふふっ、甘く見てはいけませんよ？「メイドは一日にして成らず」ですからね。」

笑顔を交わすベルファストとジャベリン。スターリンも一度執務室に戻ろうと立ち上がる。

「達者でな、ベルファスト。また会おう。」

「ご主人様こそ、お元気で。それでは。」

3人の背中を見送るスターリン。昼と同じようにふと空を見上げると、夕日は沈みかけ、紫がかった空に一番星が煌々と煌めいている。

その輝きはまるで、あの空間で見た「オブザーバー」と名乗った少女の瞳のようだった。

(あいつが私に何を期待しているかは知らんが、私の好きにさせてもらうぞ。私はタダで他人の言いなりにはならん。)

これはまだ初陣。戦いはまだ始まったばかりなのだから。

鋼鉄の男は傍に2人の少女を従え、瓦礫の山を越えていく…